

(1999年冬号) 消えていった正月

二十五年くらい前からなるだろうか。我が家では大晦日はスキー場に宿をとり、元旦はゲレンデで日の出を拝むのが習慣になっていた。かつてスキーに夢中の時期があり当時まだ小学生だった息子二人と女房とで試しに山での正月をしてみたところ、家族にことのほか好評で、以来ずっと続けてきたのだ。

その後、息子達は成人して家を離れ参加することはなくなったが、女房と二人のスキー行は一度の中止もなく続けて来た。

が、今年はやめにした。私の年齢では、もうスキーは苛酷だと気付いたからだ。若者の群れにまぎれ込んで氷点下の烈風にさらされるだけの体力も気力も残念ながら失せてしまった。

スキーに夢中だった頃、こんな事があった。

正月二日の夕刻、家族と一緒に戻って来てふと気付くと、ご近所の家はどこもメ飾りが戸口に掲げてある。「あ、暮に歳の市に行くのを忘れていたな」

飾りをしないのは、前年そのお宅にご不幸があったせいだ、と聞いたことがある。我が家は元旦も留守にしているが灯りもつけず、しかもメ飾りもないとすれば、何かがあったのだろうかと近所のうわさにならぬとも限らない。スキー道具を放り出してメ飾りを買いに走った。

だが歳の市なんてのは大晦日で終わるものなのだ。正月二日に買いに走るなんて、余りもののクリスマスケーキじゃあるまいし、開いている店さえ少ないのだ。でもやっと見つけた。コンビニの前に一個だけ。我が家にしては立派過ぎる松飾りだったが、多少値が張っても背に腹は替えられない。買い忘れの罰だと考えてレジに行き、松飾りはいくらかと尋ねた。レジの女性はげげんな顔で一度外へ出てそれを眺め、笑って言った。

「あれは店の飾りです。売り物じゃありません」

赤面した。これも正月の古来からのならわしを、年甲斐もなく無視したせいだ。

そこで、今年には行かず猫のように丸くなって、家で正月を過ごすのだと決めたついでに、何とか昔どおりの暮と正月を追体験してみようかと考えた。でも実行する段で愕然とした。昔のならわしのほとんどはすでに消え去ってしまっているのだ。昔というのは私自身が小学生の頃、戦中である。食糧が本当にひびくする少し前だ。

当時、正月の準備は家毎にする“餅つき”から始まった。大抵の家には年に一度のための臼と杵があった。二十九日は、九＝苦で縁起が良くないとこの日をさけ、二十八日か三十日が餅つきの日。早朝、餅米のふかし上がる甘い匂いで目を覚まされた。杵をふり下す父親、あい取りをする母親に、いつもと違う雄々しさや甲斐甲斐しさを感じてあかず眺めたものだった。

威勢の良い掛け声や杵の音は、隣りからも向いからも聞こえた。あれはまさしく、正月を呼び込む響きだった。

今はといえば、家で餅をつく習慣は全くないと言ったら良いだろう。スーパーかコンビニでは時季を問わずに餅を売っていて、すでに季節の食べ物ではなくなっている。餅つきは幼稚園か保育園でやってみせる程度、幼児のお遊びの一部になっているに過ぎない。

大晦日は餅つきの日よりもっと忙がしかった。餅つきでは邪魔物あつかいで、餅をほお張った後は隅に追い払われていた子ども達も、“すすはらい”では少しは役に立つ。手拭いをマスク代りにして、男は天井、女は床と分担する中、水くみやら掃き掃除やらに追いまわされた。台所では“おせち”の準備。うま煮の鍋が音をたて、なますの大根が刻まれる。すべて形どおりの料理だが、すべて手作りだった。普段買い物など一切しない父親が、どういわけかおせちの材料だけは、二条市場まで買い出しに行っていた。こんな手間のかかることを今はもうしないのだろうか。新聞のチラシに、三の重で数万円とかいう仕出しの案内がしきりに入ってくる。

そういえばあの頃は、日用品や魚や野菜・米などは現金払いは少なかった。毎日“ご用聞き”が裏口からやって来て注文を聞き、届けてくれる。品目と値段が“通い(かよい)”と呼ばれる帳面につけられ、月末に集金に来る。いくつかの店の通いが台所の壁にぶら下がっていたものだ。

大晦日、その年最後の掛け取りが何人か来て「来年もよろしく」と日めくりのカレンダーを置いていく。

父親が居間の隅で子供たちに背を向け、何やらこそこそとやっているのは、お年玉を祝儀袋につけているに違いない。

日暮れ近く、子供たちだけで銭湯に行かされた。大晦日の銭湯はいつも満員。カランが空く隙もない。帰ると、年越しの料理が勢揃いしているのが常だった。家長の祖父がしかつめらしい顔で何かを言い、家族が神妙にそれを聞き、一斉に箸をつける。儀式、うす暗い裸電球の下に一度の華やいだ儀式であった。

元旦の朝も長男だった私は妹達より早く起こされた。門に日の丸をかかげるのも私の仕事、隣近所に父親の名刺を持って挨拶に歩くのも私の仕事だった。といっても小学生の私がする事は「おめでとございます」と大声で言ってから、名刺を置いてさっと帰ってくる。どここの家でも玄関の上りがまちに三宝や黒塗りのお盆など名刺受けが用意されていた。あれは今の年賀状がわりだったのだろうか。この習慣がいつから消えたのか私には記憶がない。たぶん終戦が、物不足がそうさせたのかもしれない。

神棚にお神酒を供えて手をあわせ雑煮を食べ終って小学校へ。元旦の式を“四方拝”と言った。今は“祝日”と呼ぶけれど、かつては“式日”と言っていた。祝日は休日だが、式日は文字どおり式のある日。休日ではなかった。式日ごとに四方拝は皆晴着で学校へ行ったものだった。

二日は“初荷”の日。卸店から小売店へ、小売店から、各家へ、その年最初に荷を運ぶ日だ。鈴をつけた馬までが着かざり、馬糞は紅白の布をまとい、米俵だの酒樽だのを満載し、半天姿の若い衆が、石油缶を棒でガンガン叩きながら何台もやって来る。威勢の良いものだった。

門付けの獅子舞も来た。あの大きな口に噛んでもらうと、一年健康とは言うが、あれは恐ろしかった。

--みんな消えてしまったな--これが実感だった。今の子どもたちが私の歳になった時、正月にどんな回想を持つのだろうか。